

図説 日本
の古典

13

御伽草子



図説日本の古典

第1巻／古事記	武漢大学教授 神田秀夫	奈良国立文化財研究所長 坪井清足	学習院大学教授 黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大学教授 伊藤 博	成城大学教授 上原 和	学習院大学教授 黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大学教授 小島瓊禮	文化庁 上原昭一	東京大学助教授 笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大学助教授 久保田 淳	美術史家 白畑よし	聖心女子大学教授 目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子大学教授 片桐洋一	大阪女子大学教授 伊藤敏子	聖心女子大学教授 目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	学習院大学教授 木村正中	美術史家 白畑よし	東京大学教授 土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大学教授 秋山 虔	学習院大学教授 秋山光和	東京大学教授 土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田大学教授 国東文麿	美術史家 梅津次郎	京都大学教授 村井康彦
第9巻／平家物語	神戸大学名誉教授 永積安明	大阪大学教授 武田恒夫	京都大学教授 上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女子大学教授 三木紀人	東京国立文化財研究所 宮 次男	東京大学教授 益田 宗
第11巻／太平記	早稲田大学教授 梶原正昭	東京国立文化財研究所 宮 次男	京都大学教授 上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大学教授 小山弘志	京都国立博物館 切畑 健	大阪市立大学名誉教授 原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究資料館長 市古貞次	美術史家 高崎富士彦	東北大学名誉教授 豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大学教授 白石悌三	文化庁 佐々木丞平	前学習院大学長 児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大学教授 長谷川 強	東京大学名誉教授 山根有三	前学習院大学長 児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学習院大学教授 諏訪春雄	大阪大学助教授 信多純一	横浜国立大学教授 辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究資料館教授 松田 修	名古屋大学助教授 河野元昭	学習院大学教授 大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田大学教授 神保五弥	東京国立博物館 小林 忠	立正大学教授 北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大学教授 水野 稔	国立国会図書館 鈴木重三	東京学芸大学教授 竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田大学教授 郡司正勝	東京国立博物館 小林 忠	成城大学教授 西山松之助

図説 日本の古典13 御伽草子

昭和55年3月20日 第1刷印刷

昭和55年4月9日 第1刷発行

著者代表——市古貞次 ©1980

発行者——堀内末男

発行所——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)238-2781

出版部 東京(03)230-6351

振替—15653 郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙——王子製紙株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。

0391-167013 3041

Printed in Japan

〈企画委員〉

東京大学教授

秋山 虔

国文学研究資料館長

市古貞次

前学習院大学長

児玉幸多

早稲田大学教授

神保五弥

東京大学名誉教授

山根有三

〈第一三巻・編集委員〉

国文学研究資料館長

市古貞次

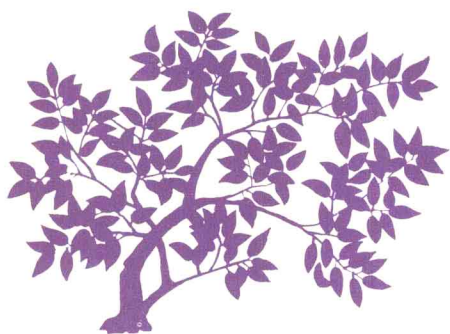
美術史家

高崎富士彦

東北大学名誉教授

豊田 武

御伽草子



集英社

目次

●カラー図版●『ぶんしょう』／『浦島明神縁起絵巻』／本庄の浜の日の出／那智の滝／清水寺／しづか 奈良絵本貼付屏風／『鳥歌合絵巻』／『熊野の本地』／
『松姫物語絵巻』／『じやうるり』／『御伽草子』と本箱／阿波人形浄瑠璃『酒吞童子話』／文楽『日高川入相花王』／『夕鶴』の舞台／新作歌舞伎『鰯売恋曳網』

日本小説史の中世―「御伽草子」の成立	市古貞次	20
物語文学の流れ 「御伽草子」の成立		

「御伽草子」―作品紹介	市古貞次	30
-------------	------	----

公家に関する物語 僧侶に関する物語 武家に関する物語 庶民に関する物語
外国に関する物語 異類に関する物語

多種多様な作品群―「御伽草子」の内容	市古貞次	33
「御伽草子」の分類 「御伽草子」の特色		

●図版特集●

「御伽草子」の地をたずねて	大島建彦	101
ものくさ太郎の屋敷跡／穂高神社／物奥社大神の石碑／寢覚の床／浦島観音像／鹿島踊り／文太長者の屋敷跡／寢屋長者の屋敷跡／大江山／青葉の笛／ 『大江山鬼退治』襖絵／五条天神社／『宝船』／上杉本『洛中洛外図屏風』／高野山の奥の院		

「御伽草子」と昔話	大島建彦	103
『みしま』と「鷺の育て子」	「御伽草子」と昔話の形成	

●図版特集●

室町時代の庶民	豊田 武	121
『高雄観楓図屏風』／町田本『洛中洛外図屏風』／上杉本『洛中洛外図屏風』／舟木本『洛中洛外図屏風』／七十一番職人歌合／『職人尽絵』／月次風俗図屏風		

お伽にあらわれた民衆	豊田 武	123
「御伽草子」を育てた地盤	社寺の参拝 商人の種々相	

●図版特集●

『鼠草子』	高崎富士彦	137
-------	-------	-----

御伽草子絵の形式と作例	高崎富士彦	144
絵巻形式	冊子本の形式	

●図版特集●

御伽草子絵	高崎富士彦	153
-------	-------	-----

『伏見常盤』／『道成寺縁起』／『天神縁起』／『貴船の本地』／『秋夜長物語』／『滝口縁起』／『十二段草子』／『小敦盛』／『大江山絵詞』

御伽草子絵の画風と表現様式	高崎富士彦	160
---------------	-------	-----

御伽草子類の絵巻 奈良絵風の絵巻 奈良絵本

稚拙美の世界―御伽草子絵の流れ	辻 惟雄	169
-----------------	------	-----

「素朴様式」の発生と展開 「素朴様式」のピーク 「素朴様式」の普及と定着

世界の中の「御伽草子」	バーバラ・ルーシュ	181
-------------	-----------	-----

新しい出発点 世界文学の中の「御伽草子」

転換期の社会	豊田 武	190
--------	------	-----

下剋上の世界 都市の町衆

●図版特集●

拡大する夢	豊田 武	197
-------	------	-----

『浦島明神縁起』／『熊野の本地』／『たなばた』／『天橋立図』／『五天竺図』／『真如堂縁起絵巻』／『倭寇図巻』／『世界図屏風』／『鼠草子』／『ものくさ太郎』／『福富草紙』／『文正さうし』

広がるお伽の世界	豊田 武	204
----------	------	-----

説話を伝えるもの 説話の変化 異境滞留

刊行「御伽草子」書目総覧	徳田和夫	212
--------------	------	-----

凡例

1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、その部分の執筆者が各図版の解説にあたったが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによった。古文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

4 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は略させていただいた。

5 本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第一三巻・執筆者〉

美術史家

高崎富士彦

国文学研究資料館長

市古貞次

横浜市立大学助教授

原道生

東洋大学教授

大島建彦

東北大学名誉教授

豊田武

東北大学教授

辻惟雄

ペンシルベニア大学準教授

バーバラ・ルーシュ

学習院女子短期大学講師

徳田和夫

〈装幀〉

後藤市三

ヘレイアウト

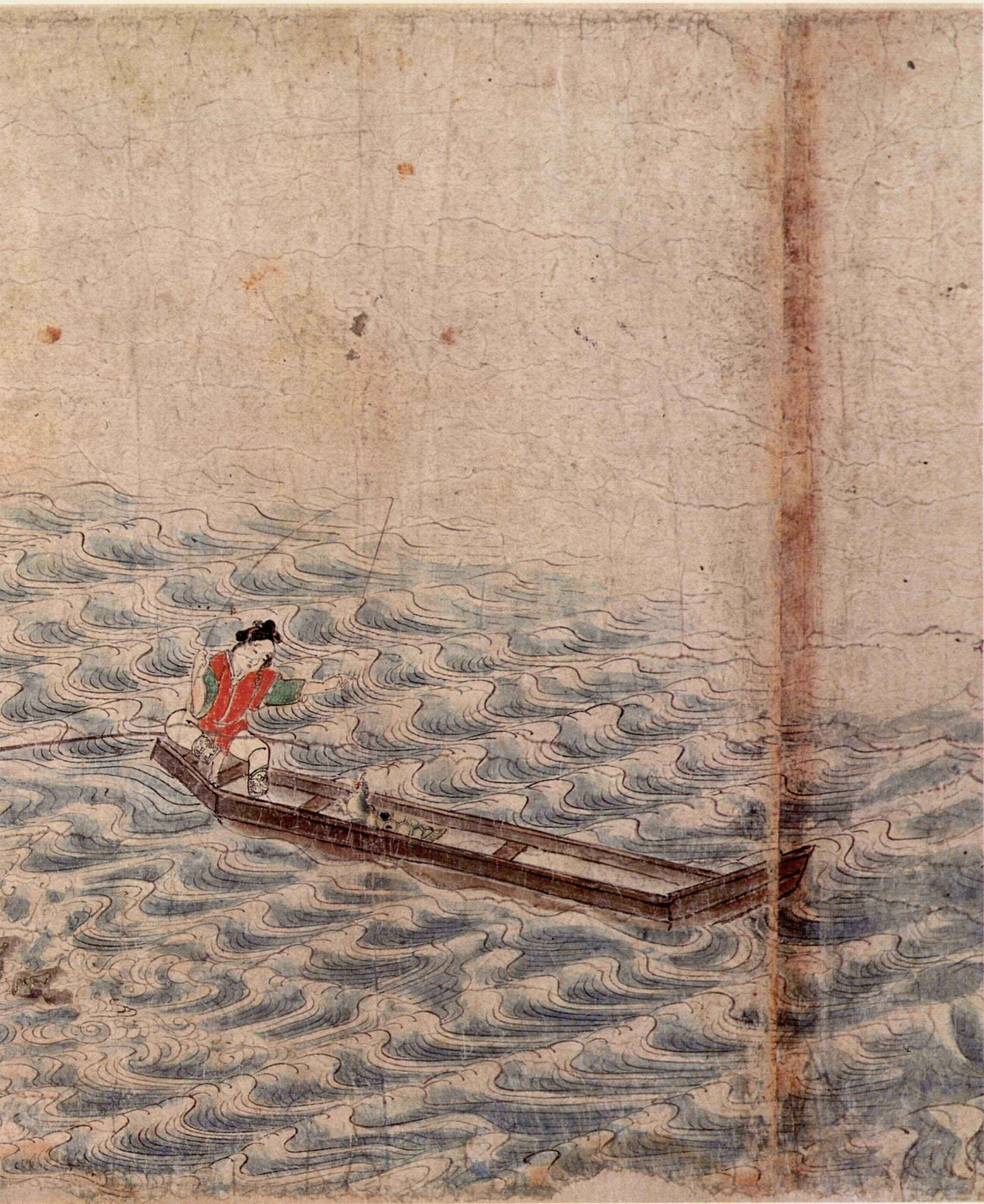
宇喜多邦嘉

樋口英男

[illegible]

1 『ぶんしょう』——『御伽草子』23篇の一つ。庶民の立身出世談として有名なものであり、祝儀物といわれる。鹿島の大宮司に仕えていた文太は、塩屋に奉公し、独立して金持ちになり、文正常岡と名を改める。鹿島明神に祈願し、2人の娘をもうける。姉の娘は納言の子二位中將の妻、妹は女御、文正は大納言に出世し、善根をつめて100歳以上の長寿を保ったという筋である。この本は奈良絵本と、この場面は画風の佳作である。本図は塩焼ききのと。江戸中期。縦23.5cm 横17.5cm / 京都大学文学部

『ぶんしょう』・釈文
家にかそ掃りける。女房を近付、「いかにわごぜ
思ふにさい有、とくく・古郷へ御掃り候へ」といひけれ
ば、女房聞「大ぐうじ殿より掃りてわれをおひ
いたすは、いかさま大ぐうじ殿の御はからひにて、別
のつまを御まうけ候へ」と仰候や。何をとがにて
御はいせ候ぞ」とかこちける。文しやうげにもと思ひ
て、「大ぐうじの、仰らるゝ事もなし。又心をは
うつすかたもなし。さらくゝをろかに思ひ奉らず
候へども、大ぐうじの、おはせられごとには





2 『浦島明神縁起絵巻』部分——1巻。
浦島明神の縁起を唱導するために作られた絵
巻で、詞書(ことばがき)は別巻になっていた
らしい。極彩色の派手な絵で、描線は練達
し、流動感のある独特の画風を示す。本図
は、浦島が亀を釣りあげる場面。波濤の描き
方、岩山の表現などを見ても筆法にすると
きがあり、構図もすぐれている。浦島の絵
巻としては古い作例で、おそらく室町時代
であろう。紙本着色。縦32.5cm／京都府・宇良神社



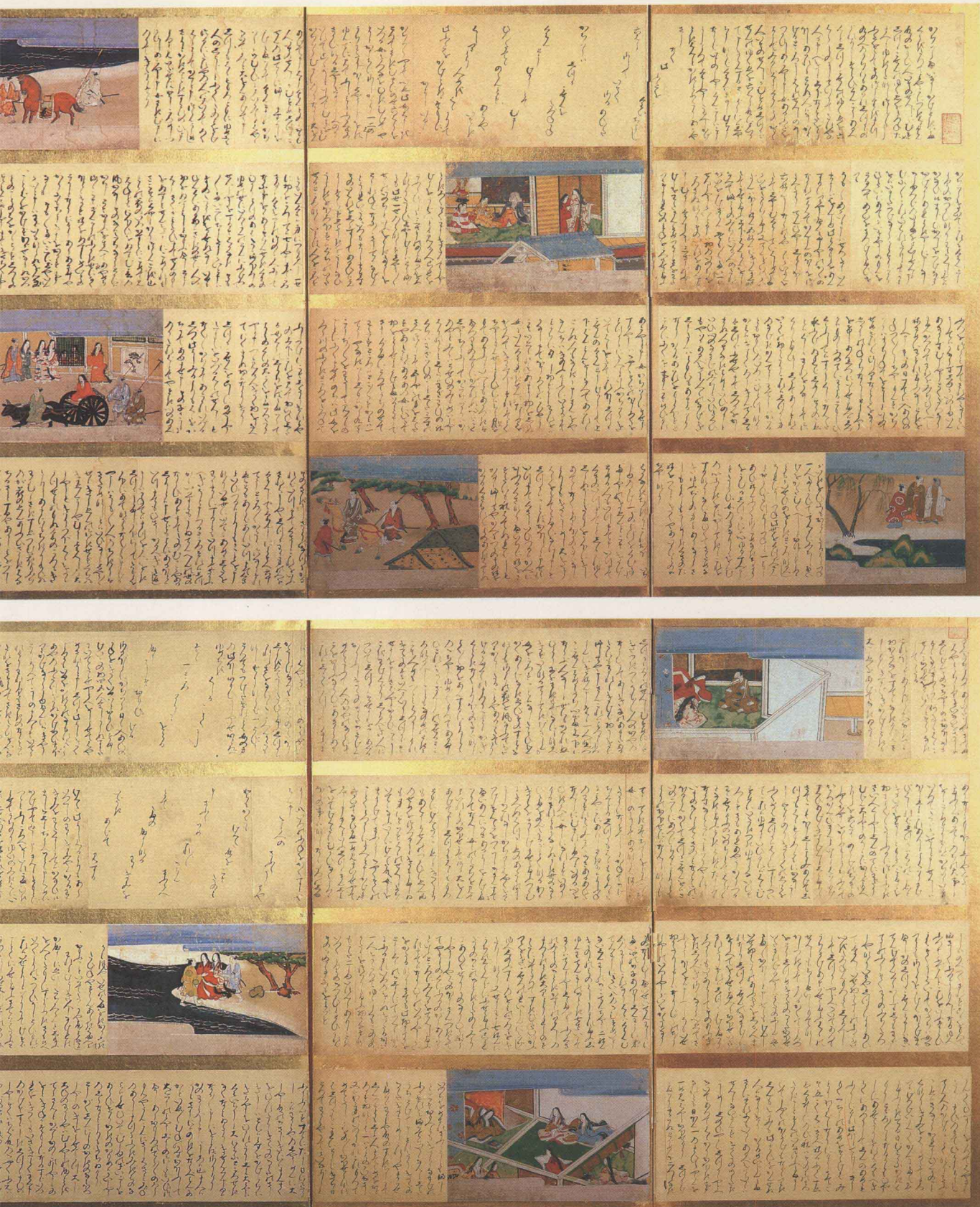


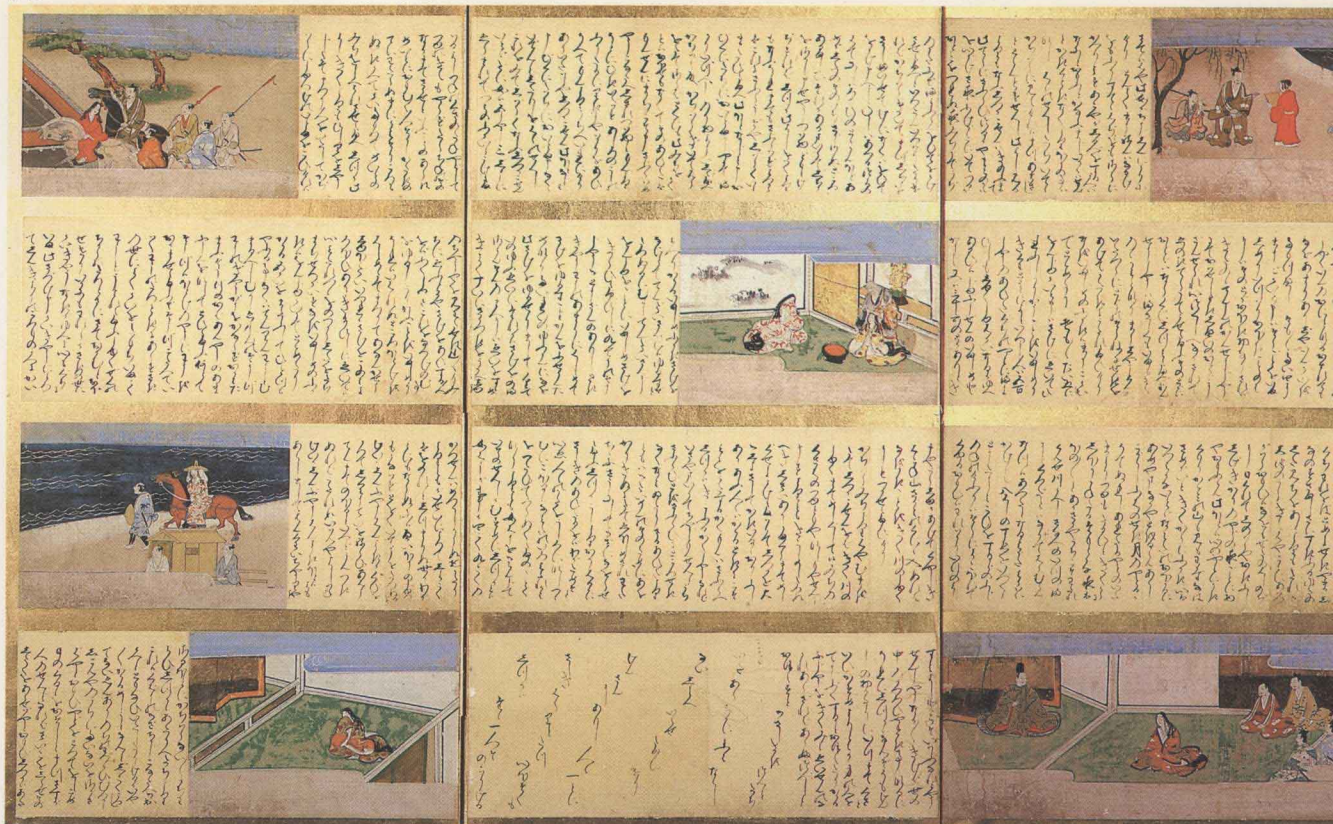
3 本庄の浜の日の出——浦島伝説の主人公の故郷については、いくつかの伝承があるが、『日本書紀』には、「丹波国(京都府)余社(よさ)郡筒川人、瑞江浦島子(みずのえのうらしまのこ)」とあり、現在、京都府与謝郡伊根町本庄(本図)あたりがそれであろうといわれている。天の橋立の北、奥丹後半島の北東部の海岸で、『浦島明神縁起』を蔵する宇良神社から東1.5kmの漁村で、筒川が海に流入する海浜である。東に日本海が見渡され、『万葉集』の「春の日の霞める時に墨江(すみのえ)の岸に出てみて釣船のとをらふ見れば古の事ぞ思ほゆる」という長歌や、『浦島太郎』などがそぞろ思い浮かべられる。

4 那智の滝——平安時代以来、熊野三山へ参詣する人はひじょうに多い。「御伽草子」では『熊野の本地』があり、弁慶は熊野育ちで、『道成寺縁起』の主人公は熊野詣での若い修行者であった。三山のうち、那智山の大滝(四十八滝の一の滝)は、熊野信仰の中心の一つで、修験者の道場であったが、那智山中腹の絶壁から113m直下する景観はすばらしい。『平家物語』(巻10「熊野参詣」)にも、「三重にみなぎりおつる滝の水、数千丈までよちのぼり、観音の霊像は岩の上にあらはれて、補陀落山(インドの観音の住む山)ともいふべし」とある。和歌山県東牟婁郡那智勝浦町。

5 清水寺——宝龟11年(780)、坂上田村麻呂が創建したという洛東、東山の名刹であるが、中世文学の舞台として登場し、「御伽草子」にもここに参詣し、祈願をこめ、あるいは夢のお告げを受けたことを描いた作品はひじょうに多い。本図は、南下方から清水寺を写したもので、右に舞台造りで有名な本堂が崖にのぞんで建っており、朝倉堂・田村堂・経堂・三重塔と左へつづいている。雪景色の清水寺は、何ともいえぬ静けさをたたえてすばらしい。京都市東山区清水。







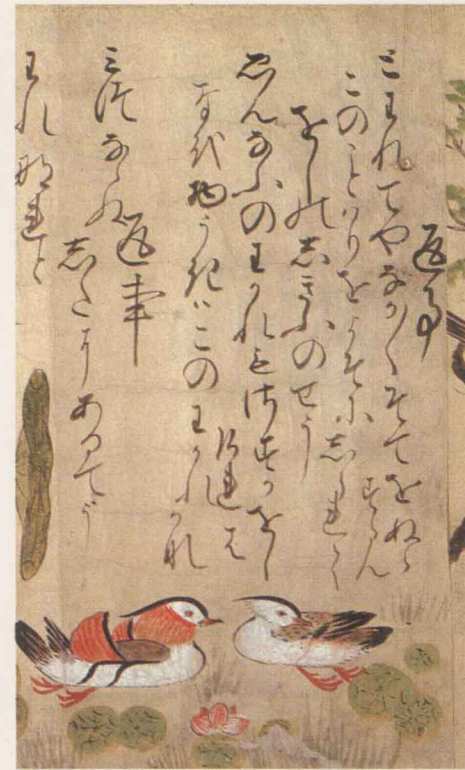
6-B



6 『しづか 奈良絵本貼付屏風』——幸若舞曲『しづか』から取材した物語を描いた奈良絵本を、屏風に貼付したもの。いわゆる判官(ほうがん)物で、義経の愛人静(しずか)は、京都で母暖庵尼の召使いの密告で捕えられ、鎌倉に送られた。生まれた子は、由比ヶ

浜の海へ投げられてしまう。静は北の方に『伊勢物語』の奥義を講じ、若宮八幡の社前で義経を偲ぶ舞をまう。頼朝から恩賞を賜ったが、鎌倉中の社寺に寄進して、都へのぼったという筋のもの。江戸初期。6曲1双。縦85.0cm 横176.0cm/国文学研究資料館

7 『鳥歌合絵巻』部分——1巻。異類物の一つで、歌合を加味する。『雀の発心』『雀の松原』などの名で知られる類品が少なくない。この絵巻は、箱に土佐広周筆と記され、色彩が華麗で画品があり、類品中でもすぐれた一巻である。雀の夫婦が子を蛇に喰われ、悲しんでいるのを、いろいろな鳥たちが慰めの歌を贈り、雀はそれに返歌をする。雀の夫婦はこれを機縁に発心出家し、往生の本懐を遂げる。この絵は他とくらべて鳥の数がもっとも多く、歌の数もしたがって他本の倍くらいある。室町末期。紙本着色。縦23cm／慶応義塾大学図書館



8 『熊野の本地』部分——1巻。熊野権現が印度から垂迹(すいじゃく=神となってあらわれる)した由来を描いた本地物である。摩訶陀(まかだ)国の善財王は、後の1人せんこう女御とのあいだに1児をもうけたが、女御は他の后らの陰謀で殺害される。生まれた王子は、女御の兄の上人によって山中で発見され養われる。7歳の時、父王に会い、后らの陰謀があらわれる。父王は、王子や上人をつれて日本に飛来し、熊野の神々となった。この本は奈良絵本を巻物に改装したもの。最後に熊野の絵図20か所があり、本図は全景と本宮、那智の部分。粗放な描線と、あざやかな色彩が特徴である。室町末期。紙本着色。縦33.0cm／大阪府・杭全神社





9 『松姫物語絵巻』部分——1巻。中納言の子中将と、山科の左衛門尉の娘松姫を主人公とした悲恋道世談を描く。中将は松姫を妻を迎えるが、父母は松姫をきらい、中将の留守をねらって亡きものにする。中将は妻をさがして諸国を旅した末、その霊に会い陰謀を知る。中将は出家し、のち都にのぼり、小車に乗って大路をまわった。この絵巻には、「大永六年(1526)尋貞」の奥書があり、制作期が知られる点で、御伽草子絵の基準になる作である。引目鉤鼻の古典的手法を用いているが、構図に『御伽草子』らしい破格なところがある。室町時代。紙本着色。縦15.8cm／東洋大学図書館

10 『じやうり』部分——3巻。『十六段草子』ともいう。「御伽草子」には笛の功德を扱った話が多く、義経伝説においても義経は笛の名手とされている。金売吉次とともに奥州へくだる途中、義経は矢矧で三河国司源中納言かねたかの一女浄瑠璃姫と笛が縁で知り合い、のち義経が病にかり、盗賊の難にあった時、正八幡の神助と姫の看護で蘇生する。本図は源中納言の館の庭園。反り橋の上で、義経が女房たちの管絃に耳をかたむけている。やがてみずからも横笛を取り出して、想夫恋の曲を吹く。桃山時代。紙本着色。縦27.0cm／静岡県・赤木文庫



